

# 宇都宮の鋳物師 戸室一門の作品を訪ねて

宇都宮伝統文化連絡協議会 柏村 祐司

鋳物とは、金属を溶かして鋳型に注入し形にしたものをいい、鋳物を作る者を鋳物師という。鋳物といえば、佐野市の天明鋳物が古くから知られるが、江戸時代から明治期にかけて、宇都宮にも戸室と名乗る鋳物師一門が活躍した。

戸室家の先祖は石下氏を称し、常陸の豪族八田氏の家臣であったが、慶長二（一五九七）年、主家の没落により宇都宮の鉄砲町に移住、姓を戸室と改め鋳物師となった。戸室一門は、代々定国あるいは元番を襲名し、江戸時代には宇都宮藩の御用鋳物師を務めた程の名門である。一門は、宇都宮市を中心に六十件近い作品を

残し、中には栃木県や宇都宮市の文化財に指定されているものもある。ここでは容易に見学できる市内の作品について紹介したい。

まず、大谷寺の銅鐘である。この鐘は口径四九<sup>セ</sup>と比較的小形であるが、端正な姿に古い様式が見られる。銅鐘に刻まれた銘によれば元禄八（一六九五）年、同寺住職心賢が戸室一門の初代戸室重郎兵衛尉藤原定国に制作させたものである。大谷寺境内には、この銅鐘の他に銅灯籠がある。これは享保元（一七二六）年、新里村の高橋吉勝が寄進したもので、制作者は戸室将監元蕃である。総高二四<sup>セ</sup>、極めて多くの意匠を駆使した見事な作といえる。



善願寺の銅造盧舎那仏坐像

戸室一門の手になる銅鐘は明治に至るまで数多く作られ、大谷寺のほかには宇都宮市内には埴田四丁目の慈光寺、竹下町の同慶寺、大通り五丁目の清巖

寺、今里の羽黒山神社にもある。慈光寺の銅鐘は、宝永四（一七〇四）年、戸室十郎兵衛藤原定国の作で、口径五九<sup>セ</sup>と市内の銅鐘の中では大形である。同慶寺の銅鐘は、享保元（一七二六）年、戸室将監定国の作で、銅鐘を吊り下げる竜頭が欠けている。清巖寺の銅鐘は、銘に「万治三年鋳物師宇都宮大田喜平治藤原忠清」とあるが、現在のものは、万治三年のものが火災で焼失したので新たに寛延四（一七五二）年、戸室将監藤原元蕃が作ったものである。羽黒山神社の銅鐘は、撞鐘堂建立時の記録によると元禄十四（一七〇二）年、佐野天明鋳物師作とあるが、銅鐘に刻まれた銘には「文政元

（一八一八）年に再び作り替えた」とある。ただし「佐野天明鋳物師戸室将監造之」と戸室将監が天明鋳物師となっているのがいささか気になる。

仏像では南大通り



大谷寺の銅鐘

二丁目の善願寺の銅造盧舎那仏坐像が知られる。本堂前に安置されている露座仏で、通称「大豆三粒の大仏」として市民に親しまれている。享保二十（一七三五）年、善願寺住職栄祐上人の発願により建立されたもので、戸室将監藤原元番と江戸の鋳物師西村和泉守との合作になる。連弁台座を含めると高さ四六〇<sup>セ</sup>と巨大なものであるが、全体のバランスが良く、作技も優れており、戸室一門の作品中の優品である。

このほかでは、上桑島町の金剛定寺の銅造宝篋印塔がある。元文元（一七三六）年、戸室将監藤原元蕃の作で、総高さ総高三三〇<sup>セ</sup>、均整のとれた優美な姿をしている。ここでは戸室一門の作品の一部を紹介したに過ぎないが、宇都宮から優れた鋳物師が輩出したことに誇りを感じる。皆さん方もぜひ現地に足を運ばれたら幸いである。